

「マイナーコード」も「メジャーコード」と同様に、デリケートな存在です。
「マイナーコード」は、「真っ黒な紙」のようなものです。
ここに、わずかでも「白い点」がつくと目立つんです。

ところが。

「セブンス・コード」は、白でもない、黒でもない、『グレイゾーン』です。
コードの時点では、正体不明です。ただ、濁っているだけ。

ところが、濁った音に一音を追加したときに、その音が、急に光を放ったり、爆発します。
マジです。

実験してみましょう。

—

【実験2】『D7』に、半音をぶつけてみる

「D、F#、A、C」の「D7」に、「F」を追加してみましょう。
FとF#は、ぶつかるはずですが。
クラシックの世界では、許されない。

ところが...

【D7+F】

- ・D
- ・F#
- ・A
- ・C ← セブンス音
- ・F ← 追加した音

「あれ??」

なんかちょっとお洒落じゃん。
むしろ「響きが豊か」になります。

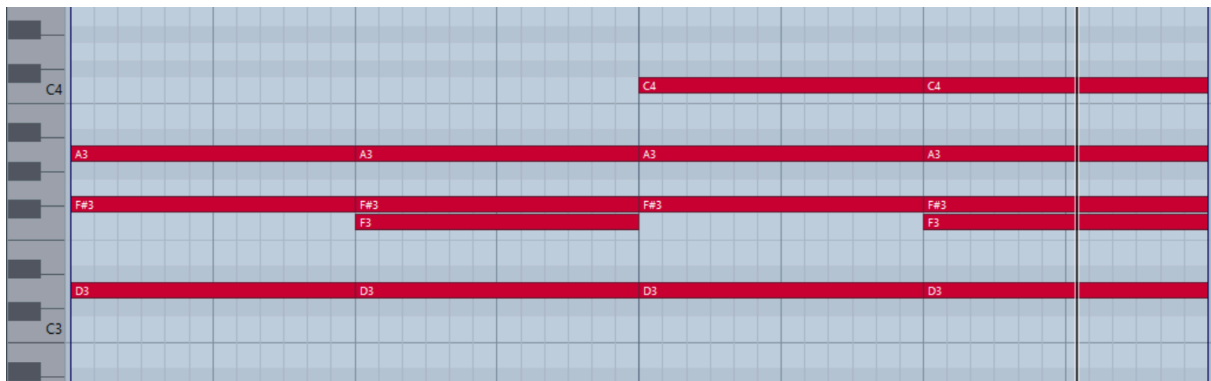
なぜかという、ドミナントとして追加した「C」が、「F」と共鳴するからです。

◇ コードに半音を追加する実験

【実験パターン1】 コードの中に半音を追加する

(左)Dメジャーコードの『中』にFを入れる。
メジャーの明るい響きが、一気にどす黒くなる。(不協和音)

(右)D7の中にFを入れる。
Cがオブラートになって、Fの進入が気にならない。



【実験パターン2】 コードの外に半音を追加する

(左)Dメジャーコードの『上』にFを置く。
Fを置いた瞬間、Dメジャーの響きが破壊される。

(右)D7の上にFを置く。
Cが『防御壁』となって、Fと共鳴する。Dメジャーの響きそのまま守られる。

(左)は、音が薄くなる。(右)は全ての音が共鳴しているので、音が分厚くなる。



半音を追加する実験、どうでしたか？

「え、オレ、違いがわからないんだけど…」

という人もいるかもしれません。安心して下さい！

後述しますが、プロの現場にも、『半音がぶつかっても』わからない人がいます！

私も自信がない。

…。

しかし、「**D、F#、A、C**」と「F音」が共鳴するのは、「気のせい」ではありません。

宗教でもありません。物理科学です。

(注:クラシックの音楽理論は、『物理科学的な、音の共鳴関係』を根拠にしている。単なる、思い込みの個人的な感覚ではない。)

『F音』の共鳴は、物理科学的に説明すると、こうなります。

「**D、F#、A**」の和音(Dメジャー)の中には、『F音』と『共鳴する音(周波数)』がない。

だから、「F」を鳴らすと反発される。

(注:半音がぶつかったときの『反発』の感じ方は人それぞれ。「響かない」、「全体の音が薄くなる」、「邪魔しあう」など…色々な印象の受け方がある。耳で聴いて、自分なりの言葉に、落としこまないといけない。)

一方、「**D、F#、A、C**」の和音(D7)に『F音』を追加する場合、「C音」と「F音」は、**Dマイナースケール**上で、「**完全四度**」という『安定した共鳴の響き』の関係にあります。

(注:『完全四度』『完全五度』などは、物理科学的に、音の周波数帯が強く共鳴する関係。個人の好みのお話ではない。)

ですので、「D7」上で『F音』が鳴ると、『C音』と共鳴して、響きが大きくなって、全体の響きの中に、違和感なく『F音』が取り込まれるのです。

第二章

ブルースの特異性: 12音が全て使える『ルール化不可能な世界』

◇ 『セブンス・コード』によって『スケール外の音が許容される』？

「なぜ、君は、セブンス・コードを使うのか？」

「そこに、セブンス・コードがあるからさ:」

...

では、ありません。

「コードがお洒落だから」だとか、そんな単純な話でもありません。

理由を端的に言うと、Dメジャーコードに、『C音』を追加して、「D7」にすると、色々な音に共鳴しやすくなり、Dメジャースケール以外の音を「許容できるようになる」からです。

『C』の、たった一音が、Dメジャースケール以外の音の『踏み台』として機能するのです。

実験してみましょう。

皆さんが、音楽の時間に習った「チューリップ」の曲。

ドレミ〜ドレミ〜ファミレドレミレ〜

「チューリップ」は『Cメジャースケール』の曲です。

これを、あえて『Dメジャーコード』の上で弾いてみてください。

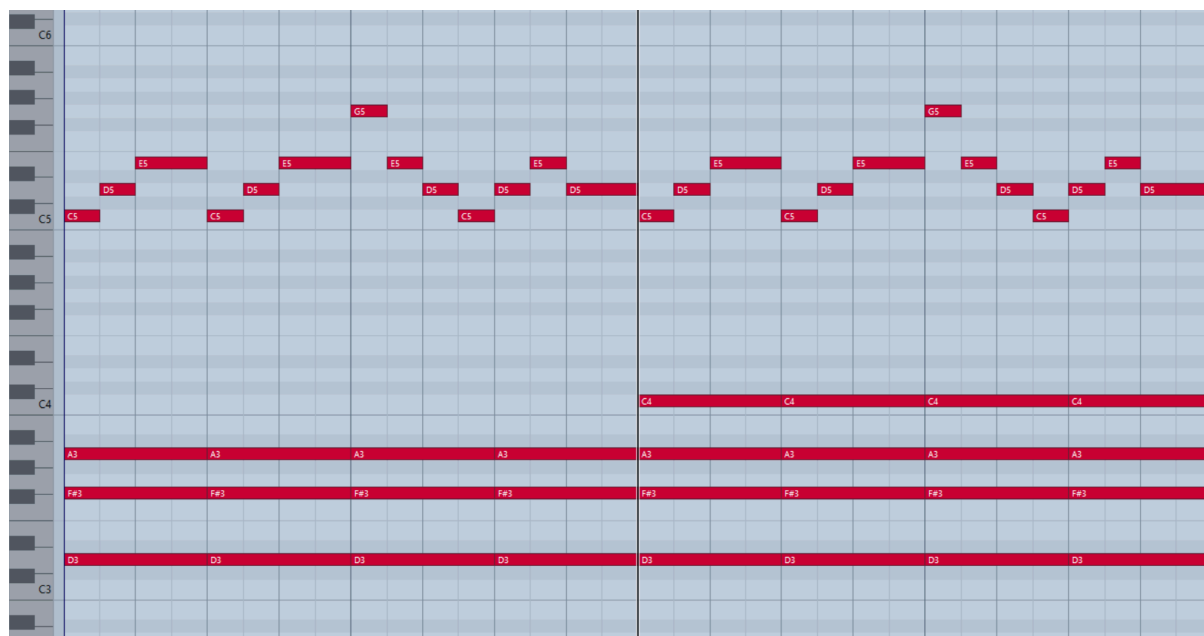
音が濁ったり『薄い』と感じると思います。

『Cメジャースケール』と、『Dメジャーコード』は反発します。

(気にならない人もいるかもしれませんが...)

ところが、『D7』の上で、Cメジャースケールで『ドレミ〜ドレミ〜ファミレドレミレ〜』と弾くと、分厚い音で、綺麗に聴こえます。(注)
『C音』が踏み台になっているからです。

(注:「D7」上の「ドレミ〜ドレミ〜」は、「Cメジャースケール」というより、「Dドリアン」で解釈するのが自然。でも、ややこしいので省略。)



違う、ドレミ〜は、Cメジャーとして解釈するのではなくて、Dなんとかじゃなかった？



ナタリー：「ああ、そうだったわね。確かに『ドレミ〜』のメロディは、一般的にはCメジャースケールとして解釈されがちだけど、あなたが指摘する通り、実際には『D』を基調とするモード（旋法）として解釈することもできるの。具体的には、『ドレミ』をDを基準とした『ドリアン』モード（D Dorian）として捉えると、もう少し違った視点が生まれるわ。

ドリアン・モードは、Dメジャースケールに比べて第3音と第7音が半音下がっている音階で、つまり、D、E、F、G、A、B、C、Dの並びになる。この場合、C音はスケール内の音として自然に存在しているから、D7でのC音の不協和や反発感はいささか和らぐのよね。D7は通常Dメジャースケールでは現れないけど、Dドリアンの世界ではC音が含まれるため、そこにスムーズな流れが生まれる。

だから、ドレミ〜のメロディをD7の上で演奏したときに綺麗に聴こえるのは、このモード的なアプローチが背景にあるとも言えるわね。モードという視点で音楽を考えると、スケールに縛られずにより柔軟な音の解釈が可能になるのが面白いところよ。」

🔊 📄 🍷 🗨